

論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称	博 士 （ 教育学 ）	氏名	李 在 鉉
学位授与の要件	学位規則第4条第①・2項該当		
論 文 題 目			
対照的視点による日韓アスペクト形式の研究			
論文審査担当者			
主 査	教授	白 川	博 之
審査委員	教授	柳 澤	浩 哉
審査委員	教授	畑 佐	由 紀 子
審査委員	教授	仁 科	陽 江
〔論文審査の要旨〕			
<p>本論文は、日本語および韓国語におけるアスペクト形式を対象とし、日韓対照の観点から、次の3つの課題について検討したものである。</p> <p>① 日本語の「-テイル」形は、基本的には韓国語の「-go iss-da」「-eo iss-da」形と対応し、ある特定の場合に韓国語の「-n-da」「-eoss-da」と対応するのか。（課題1）</p> <p>② 結果状態場面における日本語と韓国語の結果状態形の使用基準は、どのように違うのか。（課題2）</p> <p>③ 韓国人学習者が結果状態を言う場合、どのような場面で母語干渉による誤用が生じやすいのか。（課題3）</p> <p>論文の構成は、次のとおりである。</p> <p>第1章では、研究の動機と目的（課題1～3）を明らかにした上で、本研究の立場を述べ、本論文の構成を説明した。</p> <p>第2章では、先行研究として、①日本語と韓国語のアスペクト形式の対応関係に関する研究、②日本語と韓国語のアスペクト形式の使用基準に関する研究、③韓国人日本語学習者の誤用に関する研究を取り上げ、批判的に検討した。その結果、第1章で指摘した3つの課題がいずれも未解決の問題として残されていることが確認された。</p> <p>第3章では、日本語の「-テイル」形とそれに対応する韓国語の形式について検討した（課題1）。日本人が翻訳した韓日対訳シナリオ集を用い、日本語の「-テイル」形が、基本的に韓国語の「-go iss-da」「-eo iss-da」形と対応するのかについて調査を行った。その結果、「-テイル」形は、基本的には、「-n-da」「-eoss-da」形と対応し、「-go iss-da」「-eo iss-da」形との対応関係は、特定の場面に限って見られることがわかった。これは、従来一般に受け入れられ、日本語教育の現場で実践されてきた考え方とは正反対の結果である。</p> <p>第4章では、日本語と韓国語の結果状態形の使用基準の違いについて検討した（課題2）。第3章での調査結果をもとに、結果状態場面における過去形と結果状態形の使い分けが日韓両語においてどのように異なるのかを、具体的な場面に即して精査した。その結果、結</p>			

果状態場面を言うとき、韓国語では、基本的に過去形「-eoss-da」が使用され、結果状態形「-eo iss-da」は、話し手と聞き手との「情報や知識の違い（以下、「認識のずれ」と呼ぶ）」がなければ使用できないことがわかった。このことから、日本語の結果状態形は認識のずれがあるかどうかにかかわらず「変化の瞬間あるいは変化の前後の状態を把握していない」とき（井上ほか 2002）に使用されるのに対して、韓国語の結果状態形は「認識のずれがある」ときに使用されると結論付けられる。

第 5 章では、韓国人日本語学習者の「-タ」形と「-テイル」形の選択傾向について検討した（課題 3）。第 4 章の結論を検証すべく、日本語母語話者（JNS）と韓国語母語話者（KNS）・韓国人日本語学習者（K-N1, 2, 3）を対象に質問紙調査を行った。「A. 認識のずれが感じにくい 6 場面（①発話時に初めて見た眼前の結果状態 3 場面＋②対話の場で初めて気づいた結果状態 3 場面）」と「B. 認識のずれが感じやすい 6 場面（③話し手の認識と違った眼前の結果状態 3 場面＋④話し手の認識と違った聞き手の認識 3 場面）」の計 12 場面を用いて調査した。調査の結果、第 4 章の結論から予想されるとおり、韓国人日本語学習者は、結果状態を言う際に、「話し手の認識と外部世界とのずれの有無」の違いにより、「-タ」形と「-テイル」形の選択を変えることが確認された。すなわち、韓国人日本語学習者は、結果状態を言う際に韓国語の結果状態形の使用基準をそのまま日本語に当てはめている可能性があることがわかった。

第 6 章では、締め括りとして本論文の結果を課題ごとにまとめ、それをふまえて、日本語教育への提言を述べた。さらに、今後の課題について展望した。

本論文は、次の 3 点で高く評価できる。

1. 日本語の「-テイル」形が韓国語において基本的にどの形式に対応するかについて、従来一般に受け入れられてきた考え方を根本的に否定する見方を多量のデータをもとに実証的に示した。このことは、言語学的に意味があるだけでなく、韓国語母語話者に対する日本語教育の現状にも警鐘を鳴らすものである。
2. 結果状態場面における過去形と結果状態形の使い分けに関して、韓国語では日本語とまったく異なる原理が働いていることを主張した。その説明原理は、「話し手の認識と外部世界とのずれの有無」に帰するという独創的なものであり、アスペクト研究に一石を投じるものと言える。
3. 日本語母語話者、韓国語母語話者および韓国人日本語学習者を対象にした調査により、アスペクト形式の使い分けについての結論の妥当性を実証した。言語データのみによる一般化は、相当数のデータに基づいてもなお仮説の域を出ていない可能性が残るが、結論を踏まえて質問紙調査を実施したことにより、使い分け意識の存在が実証されたことになる。これは、韓国語母語話者に対する日本語教育に有効な示唆を与えるものである。

以上、審査の結果、本論文の著者は博士（教育学）の学位を授与される十分な資格があるものと認められる。

令和 元年 7 月 2 日